慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	後進諸国の社会構造と社会力
Sub Title	Structures et forces sociales dans les pays en voie de développement
Author	Balandier, Georges(Matsubara, Hideichi) 松原, 秀一
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1962
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.1 (1962.) ,p.127- 131
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000001-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

後進諸国の社会構造と社会力

Structures et forces sociales dans les pays en voie de développement

ジョルジ・バランディエ
Georges Balandier

I. 問題の所在

社会学者にとって，後進諸国は，本質的変化をうけつゝある社会と云う魅惑的光景を示してくれます。これらの国々は，いまだ過去に結び付けられながらもその構造と組織方式の近代化を余儀なくされています。この現象をよく知ることは，開発政策及び近代化政策の成否を左右し，しかも大きく左右するのであり，そのことは，最近十年来，広く世界各地で行われている諸経験の評価によって学者も，実行の任に当る者も，等しく認める事実であります。

社会力と社会構造の変化の考察に入る前に，二，三，前もって注意をしておきたいと思います。それは，問題の性質を一層よく把握し，困難さの程度を理解するのに，役立つでしよう。問題を，極端に単純にし，イメイジをハッキリさせたければ，後進国の「社会劇」は，五幕物であると申せましよう。

(1) 最初に「伝統的」と云われる社会構造と，それが規制する行動があります。こうしたものは，諸技術の水準や，経済機構の観念と釣合っています。そしてまた，文化の種々の独特な形態や諸価値に堅く結び付いています。アジアやアフリカでのこれら社会の研究は，伝統が拘束力をもって支配し，人間の諸活動が広く聖化されている強い共同体的構造を持つ社会を明らかにしました。行動が聖化されている事から，集団行動の質が，その行動から生じる財の量よりも大切にされていることに説明がつきます。これは，ヴァレリ (P. Valéry) の用語を借りれば，「統計学的総量」が，未だ，決定的要因となっていない社会と文化であります。

(2) 第二段階では，複雑な生産技術の導入と近代的経済の導入が，その度合はまちまちですが，過去との絶縁をもたらした段階です。これ等の導入は，伝統的秩序を破壊し共同体の統一を破ります。このことから，アングロサクソンの学者の中には，伝統的（古風な又は封建的な）要素と近代的要素との共存に重点を置き，これらの社会について「二元的」社会及び経済として述べている人があります。ペルー氏 (Perroux) は，現象をより正確に観察しずっとはっきり理解して，「関節の外れている社会と経済」と云う表現をしています。

(3) 第三段階に於て，社会力とイデオロギーの働きを対象とする必要があるのは，2の「骨組を外す」ことの結果生じる諸問題と関連しているのです。社会力とイデオロギーは，或は発展の動きを制限し，又は，理想化された過去への逆行に，力をかす方向，即ち，保守主義，伝統主義の方向に働くこともあり，或いは，社会的経済的変動を助ける方向，即ち革命的方向に，働らくこともあります。社会力とイデオロギーは，矛盾し，現在

の多くの新生国家の不安定さの原因となっています。

(4) 然し，社会力は，はっきりした目標を持たない限り，現実に影響出来ません。即ち，社会力は，それが範としようと欲する社会及び経済のモデルをえらばねばならぬのであります。これが，この「劇」の第四幕であります。自由民主諸国の例，社会主義国家の例または，共産主義国家の例に依って，新しい社会機構を作る方向に向うのであります。この選択は，決して簡単ではなく，適合化なしに行われることも決してないのです。新中国が，社会，経済発展のマルクス・レーニン主義を，採った場合を見ても，そうです。

(5) 第5段階が，これから先の未来に残されていることには，もう気付かれたでしょう。今日，経済成長と，近代化の諸問題に直面している国々の成否は，時が示すでしょう。結果が，悲劇になるか，ならぬかは，偏に，その国の意志に依るものですが，また一方，富める，近代的装備のある国，パンディ・ネール首相が「機械という同一の神を崇める故に」同類であるすべての国々（共産主義国か非共産主義国かと云う問題は，氏にとっては，ニュアンスの問題でしかないので）の理解と意志にも依っているのであります。

II　若干の実例

以上の説明は，抽象的で，理論的に見えます。これから，実例に依って若干の様態を説明する段階です。まず最初に，社会構造と，伝統的文化に関して現われる問題を採り上げましょう。

(1) 社会構造と伝統的文化とは，長い伝統にしたがいよく知られている社会的背景を持つ，と云う利点を持っていますが，それは，現代の発展諸計画と多少の程度の差はあっても両立出来るように，行動や態度を規制しています。

(a) 第1の例は，人口動静の例です。人口動静は，人口増加が，経済発展の結果と競い，時には，その効果を無効としてしまう様な危険がある時は，特に重大であります。年間人口増加率 2.5 パーセント（アジア・アフリカでは普通の数字です）の時は，生活水準の単なる維持の為に，国民所得の 10 パーセントを当てる必要があることを考えれば，この危険は容易にわかります。「家族計画」を採りいれた印度，マルクスとマルサスの間で迷い，その両者の教えを共に採り入れた新中国の例は，人口動静を規制することの必要性と，実際にそれが問題点であることを示しています。こゝには，社会生活の他の分野よりもはっきりした抵抗があるのです。このことは次の点から理解されます。一方では，後進国は，最近まで（近代的衛生施設等が導入されるまで）死亡率（特に小児死亡率）の大変高い地域だったことです。これは，40 から，45 パーセントという高い出生率に依って補正されていました。

又他方では，この人口問題での「多産主義」への刺激は，或る種の社会的及び文化的事実で強調されていたことです。結婚形態や性道徳，家族の構造，宗教的圧力は，こゝでは直接の刺激になります。人口学者，F・ロリマー氏（Lorrimer）は，著書「文化と人口増加率」の中で，前工業的又，過渡的工業国と云われる国について次のような相関々係を示しました。この地域では，第一の富は，人間そのもので出来ているというのです。この傾向は，伝統文化が，一貫性を持っている間続くのです。この傾向の働きかけは二重になります。というのは，それは，人口増加と経済成長の双方の間の均衡に難かしい問題を課すからであります。前にも言及しましたが，この傾向は，目下新生国家をして，多くの若い人口を持たせています。15 才以下の人口が 40% を占めるのが，広く後進国の特徴となっています。南アジアとアフリカでの調査に依っても，こうなっています。この状況は，社会政策上の難点（就学，職業教育，職業配分）を明らかにしますし，また，最近アジア，アフリカ諸国で起っている社会的動きの中で，青年の占める役割もこれで理解出来ます。

(b) 第2の例は，伝統的社会秩序に規制される経済動向の例です。この点では，我々は，或る種の制度の反経済的性格や，蓄積された富に対して表わされる反応の曖昧さに，戸迷いしてしまいます。このような両面を，具体的に検討してみましょう。

マダガスカルのティモロ地方には，王族や貴族のみが対象となっていた即位式があったのですが，後に平民もこの儀式を受けるようになりました。これは比較的最近のことで，このことは重要なのです。というのは，こゝに我々は，近代経済のもたらした富に対しての反動を見ることが出来るので，この，フィベザナ (Fibezana) と呼ばれる即位式は，平民の間では，永続性のない権威を授けるものなのです。これに依って，与えられる権力は，2年乃至4年保持されます。この一時的な権力は，必ず，その資力に依って社会的優位を得たと見なされる人に与えられます。氏族も村中も，彼の繁栄を祝い，その報償として彼を王に選びますが，同時に，この選出によって彼を徹底的に破産させ，自分達の列に引き落すのです。というのは，祭りでは，彼も彼の家族も，永いことかゝって溜めた財産を全部使って，祝宴を張ることになっているからです。このように，この即位式の機構でティモロ社会では，下からの水準化が定期的に行われています。物質的にせよ，性格的にせよ個人的優位に達する人は皆，短期間見せかけの権力を味っては，又皆と同列に戻るわけです。

この制度を研究した社会学者は，こうして一種の社会的均衡が保たれているにせよ，この制度の重大な結果は，この制度に伴う経済的停滞であることを述べています。これは，両立し得ない二要素を，はっきり示した例です。他の例では，曖昧さ，伝統の機構が命ずる行動と，近代的機構がもたらす行動との間のためらいが見られます。この現象を，私自身，レオポルドヴィル市，ブラザヴィル市方面のアフリカ人社会で観察する機会を得ましたが，資本を蓄積した人間が，選びうる二つの「策謀」を確めえたのです。

この資本を得た人間は，本当の意味での投資を行い，利潤と，個人的利益を求めることも出来ます。しかし，こうした企業家的精神を持つことは，彼を，彼自身が育った社会環境から切り離してしまいます。そこで，こうした例は少なく，主に都市並びにその周辺でしか見られません。資本を持った人間は，逆に，「社会学的」投資を選ぶことも出来ます。彼は，新しい経済条件を，伝統的な形の優位を得たり強化することに使います。

彼の被保護者 Clientèle（この語の古義）の量と，彼の施す恩恵の拡がりで彼の成功の度合がわかります。彼の利益はその威信と権威で表わされます。これが普通に選ばれる方法であります。即ち，経済機構は，在来の社会的，文化的体系に依って，広く条件づけられているのです。

(c) 近代経済から生じた財に対する態度ではなく，近代労働（特に工業に於て）に対しての態度についてみても，同様な観察をすることが出来ます。インドの社会学者，D・P・ムケルジ氏 (D. P. Mukherji) は，インド人労働者について正確でありながら，我々を戸迷いさせるような観察をもたらしました。氏は，欠勤がち，不注意，時間を守らぬこと，企業内部に於てさえ見られる労働への無頓着さの重大さを強調しています。これ等の観察をまず心にとめましょう。必要であろうと思われる各々のニュアンスの差を考えずに。大事なのは，こゝではニュアンスの問題ではないのです。要点は，ムケルジ氏が，労働者のこれらの反応を「健全にして，正規の」反応として捉えていることであります。氏は，他の所で，工業労働者のストライキの問題について述べながら，またこの見方を強調しています。そして氏は，この意志表示を「或る程度まで，精神の平安を求め，仕事や工場の騒音機械等から遠くなった社会的安静を，彼等が知っている生活方式が残り，本能的に受け容れられる生活が変らずにある村に求める，労働者達の要求に依って」方向づけられているものと見ています。

この様な研究は，工業的生活様式の迅速な普及に障害となると我々には思われる行動や態度に対する曖昧でない弁護を含んでいます。それは伝統的価値が，その存在を危うくする経済発展に対して起す反抗を示しています。一体，この二系統の要求の間に調和を求めることが可能でしょうか。それは，両立出来ない2つの項を調和させようとするような試みではないでしょうか。ここにこそ，今日の演題を正当化する関心の中心問題があるのであります。

(d) 結局，人口の動静にせよ，近代経済内の

労働又は富に対する行動にせよ，我々は，克服しなければならない多くの対立関係に直面しているのです。この克服は，人々の精神及び社会関係に影響を及ぼす行動なしには，不可能です。伝統的考え方に染っている，しかも強く染っている人々を，経済発展と工業化から必然的にもたらされる諸転換を受け容れることが出来るように導くことが必要なのです。

(2) こゝまで私は，経済発展期前及び工業化前の社会構造を，その社会構造によって左右せられる行動の面からのみ見て来ました。第2部では，如何にこれらの社会構造自身が，近代社会建設を阻害し，又はそれに貢献し得るかを検討することが残されておりましよう。

(a) 先ず注意を惹くのは，これらの様相中，阻害する方でありますが，少し先を急ぎ，簡略であることは御宥し願って，幾つかの例を挙げるに止めます。

第1例は，厳格な社会的枠が存在し，工業時代に達するに必要な社会的流動性をさまたげている社会の例です。これも又，印度の例になりますが，そこは，ガジル (Gadjil) 教授の言葉をかりれば「状況の最も注目すべき特徴は，やはりカストが優勢である」処です。この優れた専門家は，この因子の歴史的重要性は，もし，現在の情況を正しく評価しようとするなら，決して軽視してはならないことを明らかにしました。教授は，社会で占める位置と，カストの階級性，収入の水準と，知的開発の水準間の緊密な対応を示す調査結果を引用しています。ガジル氏は，社会的再組織が必要であることを認め，其の再組織は，階級制度の最下層にいる人々の平等への要求を真剣に受容する必要のあることを認めています。

第2の例は，大土地所有制が確立している封建型，または半封建型の社会の例です。この社会には，中間層はありません。大概の場合，限られた大地主，又は，富力と権力を保持する政府にあづかる大家族しかなく，一方無数の貧しい国民は，教育も受けられないでいるのです。そこでは，進んだ社会で見られるような，ブルジョワジー又は「中産階級」に当るものを見ることは無く，こうした中間グループの活力は，危険な程までに欠如しています。そして，それに代って国民に革命の支えとなるものは，しばしば，軍隊なのであります。

この型の社会では，進歩とか福祉の向上とかは，なかなか拡がりません。財力の産む利益は，貧者の窮乏をやわらげるよりも，むしろ，特権階級の富を強化することになります。イラクはこれを実例で我々に示していますが，そこでは，経済発展は，国民の生活水準を改善しませんでした。このことが，軍隊による革命を支えたのです。イラン政権が目下感じている危険も，同様なものです。そこで国王は，一連の改革（土地所有，農奴制，小作制等に関する）で国を「非封建化」するのに努めています。

(b) 此等の単純化され，そのために特徴もはっきりする例があるにもせよ，旧社会体制の或る要素は，「過渡的」段階では，役立ち得るものであることを忘れてはなりません。さもないと，完全な，無秩序の危険を犯すことになりましよう。そこで，此の問題についての研究計画に注目すべきであります。国際的機構（特にユネスコ）や，国家的機関によって実行されている諸計画があります。

III 経済的，技術的変換

以上の諸点に関連して出て来る最後の問題の番になりました。今日では最早，一つの本質的事実を過少評価出来ません。即ち，前工業的社会の改革は，単に内部資本を運用し外部の援助を得る事だけを必要とするのではないと云うことです。改革は新しい能力，動作，生活，思考の新しい方式を発達させることを要求します。

この発達を促進するための技術もあります。たとえば，いろいろの様相下のナショナリズムのような或る種のイデオロギーは，進歩をせめて一時的にでも進んで受け容れようとする感激による「ニュー・ディール」を創り出すのにうってつけです。此の意味で，後進国の経済成長を刺激するような幾つかのイデオロギーの分析は不可欠と思われます。

経済学者達は，成長政策を研究して今や，ナショナリズムの深い影響を認めています。その行き過ぎを，あるフランスの雑誌の云い方で，「小児病」と名付けて非難しながらも，R・バール (M. R. Barre) 氏は，最近の著作でナショナリズムも社会の団結を強め，活力を刺激し，経済発展からの人間的，社会的負担を受容させることが出来ることを明らかにしました。此の断言には補正を要します。以上の積極的効果は，ある条件の下でしか，はっきりと又持続的には表われないのです。もし，ナショナリズムが，バルカン化を計るような内的分割自立主義によって弱められたり，又は，その活力が，少数特権階級のためにのみ使われたりし，またもしも，ナショナリズムが，知的，物質的孤立を導いたりすれば，経済成長に益あるその刺激は，たちまち弱まってしまうのです。ナショナリズムは過去も現在も，決して危険無き武器でも又奇跡を起す道具でもありません。

アジア・アフリカにおける民族主義運動は我々に，福祉への要求よりもずっと決定的な（目下は）力を我々に捉えさせてくれます。それは尊厳への要請であります。多分，ここにこそ民族主義が我々に数えるものがあるのです。この運動は，民族主義に依って目覚めた民族の人格を再構成し，其の運動の主役である個人の人格を作り直すのです。此の運動は民族と個々の人間を，非プロレタリア化する傾向を持っています。

さて此の講演も，終えねばなりません。強力な社会力は，経済と社会組織を近代化したいと願う国々の大部分で，解き放されています。この社会力は，新しい均衡を仲々見出すに至っていません。丁度近東からパキスタン，そしてビルマまで連鎖的に起り，軍隊の力の上に「強力な」諸政権を建てた革命が，その事を教えてくれています。

もしも，内的弱点と先進国，後進国間の明らかな不平等という原因が，そのままで続くならば，20世紀後半の特色となるのは，むしろ勢力中心の移動（米国の方にと，ソ連の方に向う移動）ではなく，かえって，あちこちに無力の中心が増し，怨みと緊張の中心が諸所に増えることでありましょう。

うまくいくかいかぬかの賭けは重大であり，そしてわれわれの1人1人がこれから免がれることは出来ないのであります。　（松原秀一訳）

バランディエ博士について

バランディエ博士は，ソルボンヌの高等研究院 l'Ecole Pratique des Hautes Etudes de la Sorbonne に於てアフリカ研究センターの研究指導責任者 (Directeur d'Etudes) であり，パリの政治学研究所 (I' Institut d' Etudes Politiques de Paris) の教授として後進国問題を講じている。主なる著書としては「黒アフリカの現代社会学」Sociologie actuelle de l'Afrique Noire (P. U. F.)「黒ブラザヴィルの社会学」Sociologie des Brazzavilles Noires (A. Calin),「曖昧なアフリカ」Afrique Ambiguë (Plon) 等あり，ギュルヴィチ教授の編纂した「社会学論纂」Traité de Sociologie にも協力し, Cahiers Internationaux de Sociologie 誌の書記長でもある。主として社会現象のダイナミックな批判的解釈，低開発国の社会学的問題，アフリカ社会の近代化の問題を研究されている。